

● シリーズ 私の見た日本 Vol.241

ハイブリッドな私：文化の境界が形づくる建築観と都市へのまなざし

秋田 久岡 アリス 明香 (アキタ ヒサオカ アリス アスカ)

パラグアイ・アスンシオン市生まれ。2019年ウルグアイ国立大学卒業、2018年～2023年Lecuna&Associates建築オフィス勤務、2021年～2022年ウルグアイでのパルプ工場の建設におけるアセンブリの監督者。2024年から九州大学人間環境学府都市共生デザイン専攻でウルグアイの都市計画についての研究に取り組んでいる



アイデンティティー

私はパラグアイで生まれ育ったが、外見は100%日本人で、日系三世である。祖父母は新しい生活を求めて日本からパラグアイへ移住し、私は日本語と日本の文化のもとで育てられた。祖父母と両親が守り続けてきた伝統を自然に受け継いだ。一方で、私はラテンアメリカの明るく温かい雰囲気の中で成長したため、幼いころから「自分は何人なのか」という疑問をずっと持っていた。この二つの文化の中で生きることは、私のアイデンティティーの大切な部分となり、世界の見方や人との関わり方に大きな影響を与えてきた。そのような背景の中で、ある日系人の言葉が深く心に響いた。「私たちは日本と生まれた国の良いところを合わせ持つ120%の人間である。60%は日本人で、60%は育った国の人

間である。私たちは住んでいる国では小さな日本の大使であり、日本に対しては自分の国の大使でもある」。この言葉を思い出すたび、多くの日系人が生きる「中間の場所」、つまり文化や価値が交わる特別、ハイブリッドな空間をよく表していると感じる。

建築との出会い・つながり

私はウルグアイ共和国大学で建築学を学んだが、建築に興味を持つようになったのは祖父の影響が大きい。祖父は大工で、私は木くずや工具、切りたての木材の独特の香りに囲まれて育った。その香りは幼いころの象徴で、温かさや創造の楽しさと結びついている。父も建設業に携わっており、子どものころから図面やスケッチを見せてくれた。それは自然なことだったが、今思えば私を建築の道へ静かに

導いていたのだと思う。振り返ると、建築に興味を持つ原点は、すでに幼少期から形づくられていた。

大学では日本建築がよく取り上げられ、日本の建築家や技術、素材、文化が授業の中で紹介された。日本の話題になると、クラスみんなが私の方を見ることが多かった。それはうれしい気持ちもあったが、日本人の外見や名前を持つ自分が「全部知っているべきだ」という期待を向けられるようでプレッシャーでもあった。この経験は6年間の学生生活を通して私に影響を与え、「文化や場所に属するとは何か」を深く考えるきっかけになった。

卒業後、私は研究を続けるため日本へ来ることを決意した。それは学問的な理由だけでなく、自分のルーツである日本で生活するという特別な体験でもあった。2024年4月に来日し、期待や不安を抱えながら新しい生活を始めた。その後、多くの建築作品を訪れ、学生時代に本や写真でしか見たことのなかった空間を実際に体験する機会を得た。建築を自分の体で感じることは、この分野を選んだ理由をもう一度強く意識させるものだった。

特に印象深かったのは、坂茂氏が設計した下瀬美術館(図1)を訪れたときの体験である。建物に入った瞬間、木の香りに包まれ、時間が巻き戻ったような感覚になった。幼いころ、祖父の作業場で木片に囲まれて遊んだ記憶がよみがえったのだ。その瞬間、建築には視覚だけでなく、個人の記憶や感情に触れ、人を別の時間や場所へ連れていく力があると深く理解した。この体験は、建築の人間的な側面を意識するきっかけとなった。

また、ウルグアイ出身の建築家ラファエル・ヴィニオリによる東京国際フォーラム(図2)を訪れたことも強い感動を与えた。ウルグアイの大学で学んだ私にとって、その国は心の大切な一部を占めている。世界の反対側で同じ文化的背景を持つ建築家の作品に触れることは、私の学びと人生に深くつながる特別な瞬間だった。

都市計画への道

このような様々な経験を通して、私は都市計画への関心を高め、日本で専門的に学んでいる。日本の都市計画は高度であり、日本特有の災害に対応するため独自に発展している。技術だけでなく、人間性やレジリエンスを重視する点が特徴である(図3、4)。

特に、防災や災害予防に関する授業を履修し、島原市を対象にした研究は強く印象に残っている(図5、6、7、8)。島原市は雲仙岳の噴火で大きな被害を受け、人々は多くの苦しみを経験した。復興計画の分析や被災者の声に触れる中で、厳しい状況でも地域への愛着を失わない人々の姿に深い感動を覚えた。そして、

それを大切にしながら計画を進める日本の都市計画の姿勢に強い敬意を抱いた。日本の計画者たちは、地域の物理的・社会的・文化的な面をうまく統合し、その価値を守りながら新しい可能性を生み出している。

パラグアイやウルグアイには地震や津波はないが、洪水などの問題があり、都市計画が必要な場面も多い。日本での経験は、「都市」と「人」のバランスをどう考えるべきかという視点を深める助けとなった。都市のアイデンティティーはそこに住む人々によってつくられるため、空間づくりでは社会的な面と建築的な面を切り離さず考えることが重要である。

まとめ

最後に、この日本での生活は単なる学術的な前進ではなく、自分のルーツを深く理解するための貴重な機会となった。自分が何者で、どこから来たのかを改めて考え、日本文化の「本当の意味での大使」として生きたいという思いが強くなっている。それは個人的なことだけでなく、建築や都市計画という専門の分野でも、これまでの経験を活かして貢献したいという決意につながっている。今、私は二つの世界にまたがる存在であることを誇りに思い、その視点こそが私に独自に豊かな考えを与えてくれる源だと感じている。



図1 下瀬美術館、広島県大竹市

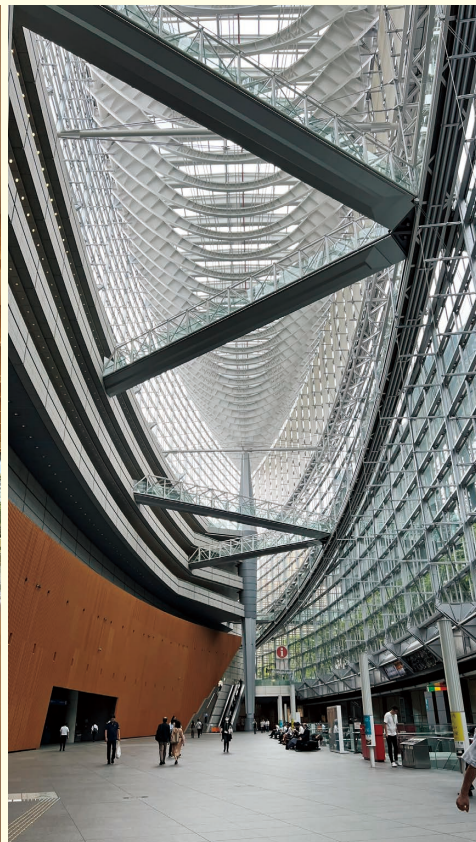


図2 東京国際フォーラム



図3 原爆ドーム、広島県



図4 平和祈念像、長崎県



図5 雲仙岳、長崎県島原市



図6 定点三角錐、長崎県島原市



図7 土石流被災家屋保存公園、長崎県島原市



図8 雲仙岳災害記念館、長崎県島原市

写真提供：著者